第二回リレー小説「梅雨」三番手

御調　響

　僕たちが部屋を出たのは、それからすぐの事だった。車に荷物をたくさん積んで、部屋に鍵を掛けて、僕たちも車に乗り込んだ。

「出発します」

「安全運転ぴょん」

　雫が嬉しそうに言うので、僕は最大限の配慮をもって車を出した。

それから三十分もしないうちに、雫は助手席で安らかな寝息を立てはじめた。出発前の「眠くないぴょん」は、どうやら語尾の方が正直だったようだ。

僕は車を西に走らせた。行く当ては無かった。ただ、西の方が陸地が多かっただけだ。車で海は進めない。

　小雨だった雨は夜中に一度強くなって、雫が目を覚ます頃にはもう殆ど止んでいた。

「おはよう」

「んにー」

　目をこすりながら、雫は眠そうに鳴いた。

　明るくはなったけれど曇天のままの空を見て、雫はちょっと残念そうだった。

「ねえ、どこに行くの？」

雫が僕の方を見て訊く。

「どこが良い？」

少し考えた雫は、「じゃあ信州」と言った。

僕たちの行き先は、信州に決まった。

フロントガラスに水滴が付き始めたのは、昼前だった。

僕は車を走らせ続けた。濡れた路面で滑らないように気を付けてはいたが、何度か危うい場面もあった。やはりまだ本調子ではないようだ。体と頭が少し重かった。

僕たちは道中、コンビニに寄ったりして休憩を取った。雫はコンビニで、例のアセロラジュースを見つけた。僕の実家は信州ではないから、きっと貰い物か何かだったのだろう。雫があんまり喜ぶので、大きな紙パックで五つ買ってやることにした。これできっと、旅の間は持つに違いない。

助手席に乗り込んでご満悦の雫に、僕は一つ提案をした。

「先輩の所に行こうと思うんだけど」

雫はちょっと考えるような素振りをして、それから訊いた。

「信州？」

「信州だよ」

「じゃあ、いいよ」

　雫の了解を得て、僕は車を先輩の家に向けた。うろ覚えの住所で辿り着けるか、一抹の不安はあった。しかし何処かで、辿り着けるという自信もあった。

　先輩の住み家に付いたのは、辺りが暗くなった頃だった。そこは良く言えば避暑地、悪く言えば山の中みたいな所で、家と、その隣にある小屋の周りを、背の高い木々がぐるっと覆っていた。

僕がインターホンを押すと、中から男の人が出てきた。適当に伸ばして縛ったような髪のせいで、雰囲気はかなり変わっていたけれど、先輩に間違いなかった。

「こんばんは」

　僕が言うと、先輩はたっぷり二十秒は考えてから、「よう、久し振り」と言った。

　先輩は、僕の高校の時の先輩だった。僕が入った年の三年生で、当時から今まで、特別交流があったという訳ではない。高校時代は、学内で見かければ挨拶をしたし、何度かメールもしたし、一度か二度は一緒に遊びに行ったかも知れない。先輩が卒業してからは殆ど連絡も取っていなかった。

　ただ、どこで聞いたのか、現在売り出し中の画家である先輩の住居兼アトリエが、信州にある事だけは知っていた。

　そして、突然押しかけても先輩ならば気にも留めないという、根拠のない確信もあった。

　先輩が「ちょっと待ってろ」と僕たちを通したのは、どうやら作品を置く部屋のようだった。暖かい橙色の照明が、外の木々の暗い緑と対比する、綺麗な部屋だ。広めの部屋に置かれていたのはテーブルとソファ、そして大小様々な絵だった。それらは壁に掛かっていたり、立て掛けられていたりした。彫刻の類や、何だかよく分からない立体物もちらほら見受けられた。

　雫はそんな立体に興味津々のようで、しきりに真似をしては唸っている。

やがて納得がいったのか、雫が僕に声を掛けた。

「ねえ、見て見て」

　雫が真似しているのは、彼女の隣にある立体作品らしい。細い針金で出来たそれが何を現しているのかも、雫の真似がそれに似ているのかも、僕には分からなかった。

僕は雫に、「可愛いよ」とだけ言ってやった。

　雫は照れたような、不満そうな、何とも言えない顔をした。

「少しの間、泊めてくれませんか」

　お茶を出してくれた先輩に、僕はそう言った。隣で雫が、お茶を飲もうとして「あちっ」と声を上げた。

「それは良いけどさ」

　先輩は頭を掻いて言う。

「ここ場所も寝具も無いぞ？　お前は良いとして、そっちの彼女にも雑魚寝して貰うしかないんだけど」

「大丈夫です」

　僕は答えて、雫の方を見た。雫は僕に向けこくこくと頷く。

泊まる場所が無い場合を考えて、荷物の中には毛布なんかもある。それを使えば十分事足りるだろう。

「そうか？　なら別に良いよ」

　笑いながらあっさりそう言うと、先輩は席を立った。

「俺は隣のアトリエに戻るから、この居間と、必要なら他の部屋も好きに使って。多分夜も戻んないから、適当に寝ちゃっていいよ」

　その言葉通り、先輩は夜も戻って来なかった。

　僕たちは、実は居間だった作品置き場で、言われた通り適当に過ごして、適当に夕飯を食べて、適当に眠った。

　雫は寝る前に、アセロラジュースを飲むのを忘れなかった。

「お前ら、今日どっか行くとこあるのか？」

　翌朝、簡素な朝食を食べながら、先輩が僕らに訊いた。

　僕は首を横に振った。信州なんて、どこに行って良いのかも分からなかった。一口コーヒーを含み、僕は雫に訊く。

「雫は？」

　信州に行きたいと言い出した雫ならあるいは、と思ったのだ。しかし、雫はどこか気怠そうに答えた。

「んー。雨だしね」

　外では明け方から、しとしとと雨が降っていた。

「傘があるよ」

　僕はいつかのようにそう返したが、雫は目を伏せて言う。

「それじゃ駄目だからいいの」

雨が降っていなかったら、彼女は何処へ行きたかったのか。僕は雫に訊こうとして、思い直して止めた。訊いたからといって、雨が止む訳ではない。

　僕らの会話を聞いていた先輩は、にっこりと笑って言った。

「ならさ、絵のモデルになって欲しいんだけど」

「僕らが？」

「というより」

　先輩はびっ、と雫を指した。

「そっちの彼女。どうかな？」

「私？」

　雫は怪訝な顔で自身を指さす。しかし、すぐににっこりと笑って頷いた。

「うん、いいよ」

　アトリエの椅子に座った雫はかなり緊張していて、遠目にもがちがちなのがよく分かった。

　雫は、彼女にしては随分長い事頑張っていたが、二十分もするとそわそわと落ち着かなさそうに身じろぎを始めた。しかし先輩は、そんな雫を気にも留めない。ただ黙々と下絵を描いていく。

　雫が僕に視線を寄越したので、僕は「がんばれ」と言った。

　雫はちょっと眉を寄せた後、姿勢を正した。

　暫くそうして、静かに時間が過ぎていった。静かな雨音が、アトリエに心地よく響く。

やがて、先輩が息を吐いて雫に訊ねた。

「疲れた？」

　その言葉に、雫はぶんぶんと首を縦に振る。素直な雫に一つ笑って、彼は続けた。

「そっか。じゃあもう休んで良いよ。下絵は出来たから」

「やった」

　小さく声を上げて、雫は僕に駆け寄ってくる。

「疲れちゃった。ちょっと寝てくるね」

　そう言うと、そのまま僕の脇をすり抜けて、居間の方へぱたぱたと行ってしまった。

　先輩と二人になるのは高校以来だった。けれど、特に息苦しさは感じない。高校の時も、先輩と会う時は何故か一対一だった。

　先輩は、絵の具を出して混ぜ始めた。

　僕は手持ち無沙汰になったので、アトリエのあちこちを見て回った。イーゼルに入った有名な大学の名前に気付いて、僕は訊いた。

「芸大生だったんですか？」

先輩は絵筆を走らせながら、短く「辞めた」と言った。そして、悪戯っぽく笑って付け足した。

「正解だった」

「はあ」

　僕は曖昧に頷いた。そんな僕を、先輩は「変わんないな」と笑った。

「今はフリーで色々やってる。これでもそこそこ有名なんだぜ」

「そうみたいですね」

　それは知っていた。だからこそ、ここに来られたのだ。

僕にしてみれば有り難い話だが、もしかしたら先輩には迷惑な話かも知れない。一瞬そう思ったが、高校時代の先輩を思い出し、「ないな」と思い直した。

先輩は、迷惑をかけるのも、かけられるのも大好きだった。

「――俺も一つ訊いていいか」

　先輩がそう切り出した。

「何ですか」

　僕が言うと、先輩はパレットと筆を脇に置いた。そして、身体ごと僕の方に向き直る。

「何でこんな山奥に来た？」

「雫が来たいって言ったんです」

　僕の答えを聞いて、先輩が苦笑した。

「何もこんな雨の時期に来なくても」

「雫は、つゆ風邪にかかってるんです」

　僕は言った。

「つゆ風邪」

　先輩はそう繰り返した。少しだけ驚いたようだった。真面目な顔になって、彼はもう一度呟く。

「つゆ風邪、か。ふうん」

　そうしてしばらくの間何かを考えていた先輩は、唐突に描きかけの絵を指し示した。

「この絵。出来たらお前にやるよ」

「そうですか」

「嬉しそうな顔しろよ。折角のプレゼントだ」

　僕は雫の絵を見た。絵の中では、まだ淡く、二、三の色で塗られただけの雫が、柔らかく、幸せそうに笑っていた。

　まだ描きかけのその絵が、あまりにも雫という人間を表していたものだから、僕は怖くなった。

　もし、雫が消えてしまったら。

そのあとで、僕がこの絵の雫を見たら。

僕は、寂しくて、辛くて、たまらなくなるんじゃないだろうか。

「……いつまでも跡が残るより、消えてしまった方が良いものもあります」

「そうだな」

　先輩は僕の言葉に、一つ神妙に頷いた。そして、僕に笑いかける。

「だけど、中には後生大事に抱えてった方が良いものもある」

　僕は、彼に似つかわしくないその笑みに驚いて、しばらく黙り込んだ。

　そして、そっと先輩に訊ねる。

「そんなものですかね」

「そんなものだよ」

　先輩はさっきと同じ、どこか諦めたような、けれどそのお蔭ですっきりしたというような笑みで、そう答えた。

　……そんなもの、だろうか。

　僕は少し気になって、先輩に重ねて訊ねる。

「先輩。僕の名前、覚えてますか？」

「当然だろ」

　先輩は、今度は普段通りに笑った。そして、いそいそと筆を動かし始めた。

「これで、乾けば完成」

　そう言って先輩が持ち上げた絵を、僕は見ていなかった。

「おい、大丈夫か？　調子悪そうだな」

　先輩が、アトリエの端で座り込んだ僕に、心配そうな声を掛ける。

「まあ、はい、ちょっと」

　どうやらいい加減、疲れが限界に達したようだ。体は重いし、頭もくらくらする。風邪をぶり返した症状だった。見かねた先輩が、立ち上がるのに手を貸してくれた。

「向こうで横になっとくか？　心配しなくても、お前の彼女に手ぇ出したりしないよ」

「彼女」

　僕は一瞬混乱して、先輩の言葉を鸚鵡返しにした。けれど、すぐに雫の事だと思い直した。

「彼女、じゃ、ないですよ。多分」

「そうか？　やっぱりか」

　先輩が意味深長な事を言った。適当な事を言っただけかも知れなかった。

「ねえねえ、見て見て！」

　弾んだ声で、僕は目を覚ました。どうやら居間で横になって、そのまま眠ってしまったようだ。

　声の主は雫だった。少し軽くなった体を起こしながら、僕は彼女に訊ねる。

「どうしたの」

「えへへ。じゃーん」

　そう言って雫が見せたのは、一枚の絵だった。恐らく先輩の描いたもので、描かれている人物にも見覚えがあった。

「僕？」

「そう。センパイに描いてもらったの」

　呆けた僕とは対照的に、雫はこの上なく楽しそうだ。僕は寝起きのぼんやりしたままの頭で雫に訊く。

「何でまた」

　すると雫は、ちょっと動きを止めて、それからにっこりと笑って言った。

「持っていくの。あっちに」

「あっち」

「そう」

　雫は頷いた。それが何処なのか、僕は聞きたくなかった。

「だからね」

　幸いにも、雫はそう話を続けた。脇に置いていたものを、彼女はそっと持ち上げる。

　それは、先輩の描いたもう一枚の絵。

僕にくれると言っていた、雫の絵だった。

　丁寧に色が塗られた雫は、外見もさることながら、何よりも本物の持つ気配を、確かに写し取っていた。

　その絵を僕に差し出して、雫は言う。

「こっちは、持っていてほしいな」

「……分かったよ」

　僕はゆっくりと頷いた。

彼女はふんわり笑って、嬉しそうに「くーん」と鳴いた。

　雫が夕飯の用意をしに行ったので、僕は起き上がってみた。眩暈もなく、身体も前よりは大分軽い。これ以上は風邪を拗らせずに済みそうだった。

何気なく窓の外を見た。木々の向こう、厚い雲の切れ間から、透けるような橙色が覗いていた。

「夕焼けだ」

　僕は思わず呟いた。

結局雨はあの日から、降ったり止んだりを繰り返しながら、それでも毎日降っている。

あれから全部で四日、雨が降った。あと六日雨が降ったら、そうしたら、雫は。

――明日こそは、晴れるだろうか。

「いや。夜にはまた降るな」

　突然の声に、僕は振り返った。

　先輩が、意地悪く笑っていた。

　結局先輩の言うとおり、日が沈む前にはちらちらと水滴が舞い始めた。夜中に本降りになった雨は、その翌日中ずっと降り続いた。

　先輩の家のインターホンが鳴ったのは、その日だった。